春季海外語学研修報告

2022年度 カザフスタン春期ロシア語研修の再開

臼山 利信（CEGLOC）
二ノ宮 崇司（筑波大学アルマトイオフィス）

2020年初頭から顕著となったコロナ禍がようやく3年経って収束した。大学のキャンパスにも学生が戻り、かつての対面授業の日常も戻った。活気あるキャンパスをふと眺めると、コロナ禍がなかったかのような錯覚さえ覚える。

海外留学に出る者も海外語学研修に参加する者も少しずつ増えてきた。世界はもとより国内の移動も制限られた、あの不便なコロナ禍の3密を避ける生活も不要となった。本学の学群教育の外国語教育を担うCEGLOCも海外語学研修を再開することとなった。

CEGLOC外国語教育部門ロシア語セクションでは、夏期と春期にそれぞれ海外語学研修（ロシア語）を実施してきた。具体的には、夏期はロシア連邦（「海外語学研修ロシア語A」）と中央アジアのキルギス共和国（「海外語学研修ロシア語B」）、春期は中央アジアのカザフスタン共和国（「海外語学研修ロシア語C」）で語学研修を行なってきた。キルギスとカザフスタンでロシア語研修を行なっているのは、両国がロシア語を公用語とする国であり、気候、食文化、治安など、学生を派遣する危機管理の点から安心して語学研修を企画・組織・運営できると判断しているからである。令和4（2022）年度に研修を再開できたのは、カザフスタンのみである。ロシアとの交流は、現在事実上ストップしている。2022年2月にロシアによるウクライナ侵攻が勃発し、今も戦争状態が続いており、安全その他の理由から交流できなくなった。一刻も早い戦争終結とウクライナの再建･復興を願うばかりである。

中央アジアのカザフスタン共和国でのロシア語研修（「海外語学研修ロシア語C」）は、今回で6回目の開催で、繰り返しになるが3年ぶりの実施である。特に、コロナ禍で一番キャンパスライフの影響を受け、苦労し続けた3年次生が2名参加できたのは、この上ない喜びである。本科目はCEGLOC開設科目ではあるが、ロシア語専任教員が2名でマンパワーが足りない事情から、初回～3回目までは、人文社会科学研究群（科）地域研究イノベーション学位プログラム（ASIP）が主に運営を担った。4回目と5回目は、本学が文部科学省の受託事業として採択された、大学の世界展開力強化事業（ロシア、第一期 2014～2018 年度）「ロシア語圏諸国を対象とした産業界で活躍できるマルチリンガル人材育成プログラム（Ge-NIS）」[1]の支援を受けて実施した。第6回目の今回は、Ge-NISプログラムの後継事業であ

1　https://www.jstage.jst.go.jp/article/jactfl/8/0/8_117/_article/-char/ja を参照。

る筑波大学「中央アジア・日本人材育成プログラム（NipCA）」[2] の全面的な支援を受けて行なった。

カザフスタン共和国は、1991 年 12 月にソ連邦が崩壊した後に誕生した国家で、独立 32 周年を迎えた。国民の半数以上が基幹民族であるカザフ人である。そのため、その民族語であるカザフ語は憲法で国家語と定められている。ロシア語もカザフ語に次ぐ法的地位を与えられ、公用語と指定され、多民族国家カザフスタン及び旧ソ連の国々で暮らす人々との民族間交流語の役割を果たしている。

今回の研修も、多民族・多言語社会であるカザフスタンでの実践的な語学・異文化研修を通じて、ロシア語及びカザフ語の運用能力を伸ばすとともに、ロシア語圏の文化や社会の多様性に対する理解を一層深める目的で、本学の CiC 協定締結大学であるアルファラビ・カザフ国立大学準備学部及び東洋学部を受入先機関として実施した [3]。

研修期間は、2023 年 2 月 17 日（金）から 3 月 24 日（金）までの 36 日間（移動日も含む）で、11 名の学群生が参加した。内訳は、国際総合学類 4 名（2 年次生 3 名、1 年次生 1 名）、人文学類 3 名（3 年次生 1 名、1 年次生 2 名）、地球学類 1 名（3 年次生 1 名）、工学システム学類 1 名（1 年次生 1 名）、数学類 1 名、看護学類 1 名（2 年次生 1 名、留学生）である。ロシア語履修学生もいれば、ロシア語未修学生もいる。クラス分けは現地で行ない、2 クラスでロシア語研修を実施した。

研修内容は、ロシア語研修、カザフ語研修、異文化理解研修（学生交流、世界遺産等見学旅行、ホームステイ）、CiC ジュークボックス授業科目の履修（英語による授業）、渡航前危機管理研修、帰国報告会である。CiC 協定大学での研修だったので、英語による授業履修を義務付けたことは、初めての試みであった。週当たりの時間割（1 コマ = 50 分）は、ロシア語 14 コマ（文法 13 コマ、スピーキング 1 コマ）、カザフ語 2 コマ、カザフスタンの歴史（ロシア語での授業）1 コマとなっており、4 週間学習した。さらに CiC ジュークボックス授業科目を各自の興味に応じて週に数コマ履修した。

参加学生全員に研修報告書の提出を課したが、その内容は毎日が新しい発見と経験に満たされており、海外で学ぶ喜びに溢れていた。参考までに、工学システム学類 1 年の松田直也さんの研修報告書も補足資料として掲載するので、ご覧いただければ、幸いである。

最後に、今回の研修では、7 名の参加学生が日本学生支援機構（JASSO）の 2022 年度海外留学支援制度（協定派遣）採択プログラム「ロシア語圏諸国を対象とした産業界で活躍できるマルチリンガル人材育成プログラム」の奨学金（給付型）を受けた（7 万円× 2 ヶ月分）。また 4 名の参加学生が本学の令和 4 年度「羽ばたけ・

2　https://centralasia.jinsha.tsukuba.ac.jp を参照。

3　同大学は、中央アジア地域で最も研究力・教育力が高いと評価されており、2023 年の QS World University Rankings で 220 位となっている。

筑大生！」の渡航費支援の助成（10万円）を受けた。記して深く感謝申し上げたい。

来年度も学生たちに参加の機会をできる限り多く提供し、工夫を重ねながら、海外語学研修の教育活動の質を高めていきたいと考えている。

タンバル遺跡での語学研修生（筑波大生）とカザフ人学生の集合写真

日本語弁論大会でカザフの伝統的踊りを踊る語学研修生（筑波大生）